

彼女は、日本でレイプ被害の沈黙をうち破った

Motoko Rich

2017年12月29日

東京—日本でもっとも著名なテレビジャーナリストの一人が伊藤詩織さんを食事に誘ったのは、ある金曜の夜だった。彼女は、東京の通信社でのインターン期間が終わりに近づき、別のメディアでのインターンについて問い合わせていた。

二人は、都内の居酒屋で待ち合わせ、串焼きとビールを飲んだ後、食事に向かった。気分がすぐれず席を外し、トイレで気を失った後の記憶がないと、伊藤さんはその後、警察に証言した。

その夜、ホテルの部屋に連れて行かれ、意識のない間にレイプされたと彼女は主張している。

当時のTBSワシントン支局長で安倍晋三首相のバイオグラフィーの著者でもあるジャーナリスト山口敬之氏は、その訴えを否定し、二ヶ月の捜査の後、検察は事件を不起訴処分とした。

そして、伊藤さんは日本のほとんどの女性がしないことを決断する。世間に公表することだった。

5月に開いた記者会見、10月に出版した著書の中で、警察が入手したホテルの防犯カメラの映像には、山口氏が意識のない伊藤さんを支えてホテルのロビーを通り過ぎる様子が映っていた、と伊藤さんは述べた。さらに、警察は、タクシー運転手を突き止め、聴取を行い、彼女が意識をなくしたとの証言を得た。捜査官は、彼女に山口氏を逮捕すると伝えたにもかかわらず、それが突然取りやめとなったと報告したと、伊藤さんは主張した。

普通であれば彼女の主張は、世間の怒りを巻き起こすはずだが、ここ日本ではわずかな注目しか集めなかつた。

米国でキャピトルヒル、ハリウッド、シリコンバレー、メディア業界を騒がす性犯罪事件が続々と暴露されるなか、伊藤さんの話は、ほとんどの被害女性が警察に相談しない、もしくは届け出たとしても逮捕や起訴に結びつかない日本において、性犯罪がいかに避けられがちなテーマであるかを表す典型例なのである。

統計上では、日本で発生する性犯罪率は低いと発表されている。2014年の内閣府の調査によると、15人に1人の女性が、レイプ被害を経験していると回答している。一方で、米国では5人に1人がレイプ被害に遭っている。

しかし、研究者は、日本の女性は、欧米の女性に比べ、同意のない性行為をレイブと定義する割合が圧倒的に低いと解説する。日本のレイブに関する法律には、同意についての定義がなく、デートレイブは、そもそも外国の概念であり、性犯罪に関する教育はごくわずかしか行われていないのだ。

その反面、レイブシーンは漫画やポルノのなかで性的表現の延長として頻繁に描かれ、そのような素材が性教育の重要な素材として用いられる文化のなかで表現されている。

警察、裁判所は、レイブを狭義に捉えがちで、一般に物理的な抵抗と自衛の痕跡がある場合のみ犯罪を認め、被害者または加害者が飲酒していた場合には、訴えを認めない傾向がある。

先月（11月）、横浜地方検察局は、6人の大学生が一人の女子大生に飲酒を強要し性的暴行をおこなった事件を不起訴処分にした。

また、日本では強姦犯が起訴され、有罪となった場合も、服役しないこともよくある。法務省の統計によると、10人に1人は、執行猶予刑を受けている。

実際に、2017年には、東京近郊の千葉大学の学生2名が酔った女性を集団強姦した罪で執行猶予刑、他の被告は実刑の判決が下された。2016年秋には、東京大学の学生1名が、集団の性犯罪で執行猶予刑を言い渡された。

「活動家たちが「ノーは、ノー（ダメなものはダメなのだ）」キャンペーンを掲げ始めたのはごく最近のことなのです」と、上智大学の三浦まり教授は語った。  
「そのため、これまで日本の男性は、同意の意味の意識の欠如の恩恵に与ってきたと言えます。」

内閣府の調査によれば、レイブを経験した女性のうち、三分の二は誰にも相談しない、あるいは、友人や家族にも相談しないと回答している。そして、警察に届け出ると回答したのはわずか4%である。一方、法務統計局によると、米国では三分の一の被害者は警察に届け出ている。

「女性に対する偏見は深く根強いもので、性犯罪による被害をまったく真剣に受け止めていないのです」と早稲田大学でジェンダーと法について講義をしている谷田川友恵講師は述べた。

現在、山口氏に対して民事訴訟を起こしている伊藤さん（28歳）は、日本で性犯罪に苦しむ女性が直面する壁に光を当てるために、自身の事件の詳細について語ることに同意した。

「もし私が語らなかったら、性犯罪のひどい状況は決して変わらないと感じたのです。」

山口氏（51歳）も、取材に応じると同意し、レイプの罪を否定した。「性的暴行はなく、その夜、犯罪行為はありませんでした。」

「勝つ見込みはない」

伊藤さんは、山口氏と2015年4月3日に再会する前は、ニューヨークでジャーナリズムを学んでいた間に2度会っていた。

伊藤さんによると、彼女が山口氏に東京から再び連絡を取った際、山口氏は自らの支局で仕事を見つける手助けができるかもしれないと思った。そして、山口氏は、彼女を恵比寿界隈にある飲み屋と寿司屋喜一での食事に誘った。

伊藤さんが驚いたことに、他の同席者ではなく、ビールと酒を飲む場であったことだった。ある時点で、彼女は気分が悪くなり、中座して、トイレのタンクに頭をもたれ掛けて、そのまま気を失ってしまったという。

次に気がついたのは、ホテルの部屋のベッドで裸の状態で、山口氏の下で痛みで目覚めた時だった。

日本の法律では、準強姦の罪を「人の心神喪失若しくは抗拒不能に乗じて」女性と性交を行うことと定義している。米国では、州によって差異はあるものの、第2級強姦または性的暴行と同等の罪と定義する州もある。

警察は、のちに伊藤さんと山口氏を乗せ、氏の逗留先であるシェラトン都ホテルへ向かったタクシー運転手を探し出した。運転手の証言によると、伊藤さんは当初、意識があり、運転手に対して駅に行ってくれと頼んだが、山口氏は、ホテルに行くよう指示している。

運転手は、山口氏が仕事が残っていると発言していたと記憶しており、また、山口氏は、「何もしないから」などと言っていたと証言している。

ホテルに到着するころには、伊藤さんが静かになって5分ほど経過しており、後部座席に嘔吐していたのを確認している。

「男性が女性をドアのほうに動かそうとしたが、女性が動かなかったので、男性は先に降車してカバンを地面に置いてから、女性を腕の下から抱えて、車から降ろしました。私には女性は一人で歩けないように見えました」と、証言録に記載されている。

伊藤さんは、警察が入手したホテルの防犯カメラの映像にも、意識がないように映っている。本紙により確認された映像の写真には、山口氏が彼女を支えながら、午後11時20分ごろロビーを通過している姿が映されている。

伊藤さんによると彼女が目覚めたのは、午前5時ごろ、山口氏の下から這い出して、トイレに駆け込んだ。トイレから出ると、「またベッドに押し付けられました。相手は男性で、かなり強く押し付けられ、私は叫びました。」

一体何が起こったのか、避妊具を使ったのか聞きましたが、山口氏は、経口避妊薬を買ってあげると言っていました。

それには従わず、伊藤さんは、服をきて慌ててホテルを後にした。

伊藤さんは、薬を飲まされたと主張しているが、その疑いを証明する証拠はない。

一方、山口氏は、伊藤さんが単に飲みすぎただけと主張している。「居酒屋で、彼女はかなり早いペースで飲んでいたので、私は『大丈夫ですか？』と尋ねました。しかし、彼女は、『私結構いける口なんです、喉が乾いていて』と言っていました。

「彼女も子供ではないので、自分をコントロールしてさえいれば、何も起らなかつたのです」と、山口氏は主張した。

山口氏によると、彼女をホテルに連れて行ったのは、（酔って一人で）家に帰れない懸念したためで、自分自身は、部屋に戻ってワシントン時間の締め切り間に合わせなくてならない仕事があったからだと説明した。

山口氏は、伊藤さんを部屋に連れて行ったことは、「不適切だった」と認識していたが、「駅やホテルのロビーに放置するのもまた不適切だと思った」と述べた。

その後、起きたことについては、弁護士からの指示によって話すことは差し控えると答えた。しかし、伊藤さんが起こした民事訴訟で提出された書面によると、山口氏は、（衣服についての嘔吐を）洗うために伊藤さんの服を脱がせ、部屋の二

つのうちの一方のベッドに寝かしたと記述し、さらに、伊藤さんは目覚めて、（自分の）ベッド脇にひざまずいて謝ったと説明している。

山口氏の書面には、伊藤さんに対し自分のベッドに戻るように伝え、その後、自分が彼女のベッドに腰掛け、性行為を始めたが、伊藤さんは、意識があり抵抗したり拒んだりすることはなかったと記述している。

その夜以降に二人の間で交わされた電子メールには、山口氏は、伊藤さんが彼のベッドに入ってきたと、多少異なる主張を書いている。

2015年4月18日付のメールには、「あなたが意識のない間に性行為をしたのではなく、私もかなり酔っていたところにあなたののような魅力的な女性が半裸でベッドにい入ってきて、ああいうことになってしまった。お互い反省する点はあると思います」と書かれていた。

別のメールには、伊藤さんのレイプされたという主張を否定した上で、双方が弁護士に相談することを示唆し、「準強姦だと主張したところで、あなたが勝訴する可能性はない」と山口氏は書いている。

(記者が)電子メールについて尋ねたところ、伊藤さんとのやりとりの全記録を示せば、山口氏が自らの立場を使って彼女を誘った「意図はなかった」ことが明らかになると述べた。「彼女から迷惑をこうむっているのは私のほうです」とも語った。

### 羞恥心とためらい

伊藤さんは、ホテルを出て、急いで帰宅したが、今思えば、それが間違いだったと感じている。「すぐに警察に行っておけばよかった」と話している。

彼女のためらいは典型的である。多くの性暴力に遭った日本人女性は、「『私にも非がある』と言いながら自らを責めるのです」と、お茶の水大学名誉教授、戒能民江氏（ジェンダー研究）は指摘する。

東京強姦センター（SARC）の相談員田辺久子氏によると、ホットラインに相談してきた女性に対して、警察に届け出るよう助言しても、多くの女性は、警察は信じてくれないと疑念から届け出を拒むという。「自分たちが何か悪いことをしたのだと言われると感じるのでしょうか」と説明する。

伊藤さんも、男性優位の日本のメディア業界で成功するにはそのような扱いに耐えなくてはいけないのかもしれないと思いつつ、恥ずかしい気持ちもあり、誰にも話さないほうがよいと考えたと語った。しかし、その出来事の5日後、伊藤さんは警察へ行くことを決断した。

「もし、真実に向き合わなければ、ジャーナリストとして働くことができないだろう」と、考えたのだと回想した。

最初に相談した警察官は、彼女が説明する際に泣いたりしなかったため、内容に疑いを抱き、告訴しないほうがよいと勧めてきたと、伊藤さんは証言した。さらに、他の担当者からは、山口氏の立場によって事件を捜査するのは困難だとも言われたと話した。

しかし、彼女がホテルの防犯カメラを確認するよう説得したことから、警察は最終的に伊藤さんの話を信じてくれた。

二ヶ月に及ぶ捜査の末、当時フリーランスの仕事のため滞在していたベルリンの伊藤さんのもとに捜査官から連絡が入った。警察は、タクシー運転手の証言、ホテルの防犯カメラ映像、ブラジャーに付着していた山口氏のDNAを十分な証拠として山口氏を逮捕する準備をしていると伝えてきた。

捜査官は、山口氏が2015年6月8日にワシントンからの便で空港に到着予定だと伝え、伊藤さんには聴取に協力が必要なため、帰国するよう依頼した。

しかし、その当日、捜査官から再び連絡が入る。捜査官が空港にいたところ、上司から連絡が入り、逮捕状を執行しないよう指示されたのだと、伊藤さんに伝えてきた。

「どうしてなのですか？」と、捜査官を問いただしたが、「質問には答えてくれませんでした」と伊藤さんは話した。

伊藤さんは、担当の捜査官の立場を守るために、その氏名を明かさなかった。警視庁は、山口氏の逮捕状執行を取りやめたかどうかについてコメントをしていない。「法に従って適切な捜査を行い、東京地検に書類と証拠を送りました」と広報官は回答した。

強くならなくては

最新の政府統計によると、2016年の強姦の認知件数は989件、女性10万人あたり1.5件である。一方、米国では、FBIの統計によると114,730件、男女あわせて10万人あたり41件の強姦が発生している。

専門家によれば、この差異は犯罪率そのものではなく、むしろ被害者が通報をしない実態と日本の警察や検察の態度が反映されていると分析されている。

2017年夏、110年ぶりに性犯罪に関する改正法案が国会で可決され、強姦の定義は、口腔、肛門性交に拡大され、男性も被害者として加えられた。また、有期懲役刑の期間も延長された。しかし、依然として同意については定義されず、裁判官は執行猶予刑を言い渡すことが可能である。

また、最近の事犯にもかかわらず、大学での性暴力に関する教育はいまだに希薄なままだ。千葉大学では、新入生に対して、直近の集団強姦事件について「残念な事件」と説明し、犯罪を起こさないようにと曖昧に指導する程度だ。

そして、伊藤さんの事件に関しては、首相との繋がりのために、有利な扱いを受けたのではないかという疑念もある。

伊藤さんが、疑いを会見で公表したのち、ジャーナリストの田中敦氏が、事件について警察トップに直接質問をぶつけている。

安倍政権の官房長官の元秘書官だった警察官僚の中村格氏は、自分が逮捕を停止するよう命じたと、週刊新潮の記者に答えている。

事件の疑惑は、山口氏のTBS内の立場に影響は与えなかったものの、物議をかもす記事を発表したことが問題となり、山口氏は同社を退社している。山口氏は、現在日本国内でフリージャーナリストとして活動を続けている。

伊藤さんは、今年10月に体験をまとめた手記を出版したが、大手メディアは、大々的に取り上げることはなかった。

伊藤さんの事件について調査をしている数少ないジャーナリストの一人、望月衣塑子氏も、社内の男性同僚から、伊藤さんは直後に病院に行ってないのだから記事を報じるべきでないと反対されたと言い、「マスコミは、性犯罪をあまり報道しないのです」と語った。

伊藤さんが公表した理由はまさにこの点にある。

伊藤さんは、「もっと強くならなければ、そして、なぜこれがよくないことなのかを語り続けていかなくてはいけないと思っています」と語った。